
ラストミッション（マイアール皇国記外伝）

オリオン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ラストミッション（マイアール皇国記外伝）

【Nコード】

N1354B

【作者名】

オリオン

【あらすじ】

金次第で仕事を請け負う組織「ギルド」に所属する師弟コンビタックス&ルーシー。二人の最後の仕事は、全く危険のない筈だったが、お互いを思いやるが故に事態は思わぬ方向に向かっていった。悲しい師弟愛が心を打つ作品です。

発端

田舎道が一本つづく。そんな風景の先に、とある小さな村があった。赤い屋根の教会を中心に栄えるその村は、とても長閑^{のどか}だった。しかし、そのほのぼのとした風景とは裏腹に、村は大事件に見舞われていた。

「くそ！ 嫌な感じだ！」

クロテニア公国の国境警備騎士団、白狼長を務めるマンソン子爵は、苦虫を噛み潰したような顔をしていた。彼は、歳の頃は三十がらみ、いかにも現場の叩き上げを思わせる日に焼けた顔と、逞しい体つきをしている。そのため、騎士団の華麗な衣装が似合わない感じがした。

「何としても、人質を無事に救出しなければ！」

マンソン子爵の目の前には、赤い屋根の教会があった。子爵の配下である騎士たちが、その周りを包囲している。騎士団は、白い胸衣を着ている。紋様は、紅い染め抜きで、剣と盾だ。これがズラリと並ぶと、絵的にはとても綺麗だ。

しかし、教会の中から血走った目でこれを眺めている男たちにとっては、とてもそんな風には見えない。

実際、教会の中には、獰猛な連中がいた。

「くそ！ 完全に囲まれてるぞ！」

窓の隙間から外を覗く男が、仲間に向かって叫んだ。彼は、あまり身なりがよろしくない。ボロ着を身にまとい、使い古しのベルト

を腰に巻いていた。ベルトには、柄に滑り止めの革を巻き付けたナイフを、二本、差している。

教会の中には、彼を含めて仲間が十人いた。彼らは、クロテニア公国内で最も恐れられている、グルズ盗賊団のメンバーだった。さかのほ 彼らは、なぜ追いつめられたのか？それは、約五時間前に遡る。

それは、簡単に終わる筈の仕事だった。ただ、森の小道をたった一台で通る荷馬車を襲う。グルズ盗賊団に取っては、毎日の習慣、例えるなら、歯磨きより難易度の低い仕事だった。

荷馬車を襲うのは、グルズ盗賊団の一部隊、仔鹿組。その数、十六名。荷馬車を取り囲んで、一斉に襲いかかった。

「くそつたれ！」

仔鹿組の組頭を務めるジョンは、大声で叫んだ。

それは、罠だったのだ。馬車の荷台に積んであったのは、お宝ではなく、剣を構えた騎士たちだった。

激しい戦闘が始まると、森のあちこちから、馬に跨った完全武装の騎士たちがやって来る。ジョンたち仔鹿組は、国境警備騎士団の策略に落ちてしまった。

しかし、騎士団にも大きな誤算があった。それは、仔鹿組による常識外れの抵抗だった。そのため、十人に包囲網を突破され、森の近くにある平和な村の教会に立て籠もられていた。

強襲！

何の進展もないまま、五時間が経った。人質の数は五人。司祭と四人の子供たちだ。彼らは、教会の奥にある祭壇の下で、体を寄せ合っている。盗賊団の配置は、人質を取り囲むように五人。後の五人は、入り口付近に居た。

やがて、日が傾き始め、今までとは反対側のステンドグラスの明

かり取りから、虹のような光彩が差し込む。教会の中で変化が起きたのは、その時だった。

「そろそろ、終わりにしません？」

ニコリと笑いかけてきたのは、一人の少女だった。

彼女は、扉側の五人に近づいて行った。

その少女の出現に、盗賊たちは啞然としていた。慌てて、人質の人数を数える。人質の子供たちは、減ってはいない。すると、目の前の少女は、何処から来たのか？

彼女は、金色のサラサラした髪を短めにカットしていた。それは、まるで男の子みたいな髪型だった。瞳の色は青灰色。ひどく寂しい色だった。ピンク色の唇が、白い健康的な肌に映えている。背は小柄で、曲芸師のようにスリムで軽やかだ。ゆったりとした空色の上着に黒いズボン。ズボンの裾は、動きやすくするために赤いリボンが巻いてあった。靴は、なめし革の短い物を履いている。彼女は、何も武器を持っていないようだった。それに、とても可愛らしい。だが、盗賊たちの勘が、目の前の少女が危険だと知らせていた。

まず、三人の盗賊が、ボーガンを少女に向けて発射した。

彼女は、体が柔らかい所を見せた。前後開脚で床にペタンとついたのだ。三本の矢が、彼女の頭上を通過する。

最初の攻撃を避けられた三人の盗賊たちは、腰の剣を抜いて斬りかかるうとしていた。その時、少女の左手から金色の糸が繋がっていることに気が付いた。糸の先には、金の釣り針が付いていて、それぞれの服に引っ掛かっていた。

「何だ？ こりあ？」

盗賊たちが疑問に思った直後だ。目の前の少女の髪が逆立ち、目の色が金色に変わる。

「雷！^{いかずち}！」

彼女が叫ぶと、左手から伸びる金色の糸が、輝く光の糸に変わった。そして、それに繋がる盗賊に電流が流れる。三人の盗賊は、そ

の場で気絶した。

「こいつ！ 魔法使いか？ さては、ギルドだな！」

残りの内の一人が、剣を引き抜き、仲間の仇とばかりに斬りかかった。しかし、少女が頭上に両手で差し出した光の糸に阻まれ、火花を散らす。

その盗賊も、少女の魔法能力「雷」の洗礼を受け、その場で気絶した。

一方、少女の後ろにも、五人の敵がいた。こいつらが、少女に襲い掛かるうとする。その時、その内の一人が、いきなり誰かに突き刺された。

見ると、何もない空間に、長い刀の刀身だけが存在した。

その刀は、そのままフラスナーでも開くように空間を切り裂き、一人の男を出現させた。謎の男は、濃紺の衣装で全身を包み、東洋独特の片刃の長刀を携えていた。背は高い方ではなく、痩せ型。黒髪に表情の少ない顔立ちだが、冷たい感じは無く、自然体といった雰囲気だ。彼は、刀を鞘に収め、腰を低くして構えた。

「こいつ！」

盗賊たちが剣を振り上げた刹那！謎の男の刀が閃く。四人の盗賊たちは、自分たちが斬られたことを認識していた。しかし、その証拠となるはずの刀傷が見当たらない。すると、服に血が滲んできた。どうやら、服を切らずにその下の肉を斬ったらしい。盗賊は、驚きの表情を残して倒れた。

最後に残ったのは、グルズ盗賊団の仔鹿組組頭、ジョンだけだった。

「仕方ねえな！ 俺だけ生き残っちゃったらオヤジ（クリード）に申し訳が立たないからな！」

ジョンは、少女に斬りかかる。

少女は、三本の金糸を左手から放った。

ジョンは、両手にナイフを持つと、先に釣り針の付いた糸を弾き

飛ばした。少しビリツと来たが、ナイフの柄に巻いた鹿革のおかげで気絶せずにすんだ。

「おたくの手品は通じないぜ！」

それでも少女は、今度は右手から三本の金糸を放つ。

「おたくには、学ぶ姿勢がまるでないんだな」

呆れ顔のジョンは、再び金糸を弾く。しかし、今度はさつきと違った。弾かれて地面に落ちるはずの金糸が、ジョンに吸い着けられるかのように向かって来たのだ。そして、ピタリと張り付いた！

理由は、最初の攻撃にあった。最初の攻撃で少女は、ジョンの体に+極の電気を運びさせたのだ。その後、+極の金糸を投げたので、金糸は勝手にジョンの体を求めて行ったのだった。

少女は、電気の特性などは知らなかった。電気という言葉さえ知らないだろう。ただ、今までの実践の経験から、そんな使い方ができることを学んでいた。

「おい、俺の負けだ。さっさと決着をつけろよ！」

ジョンが、諦めたように呟く。

少女は、少し悲しい顔つきになると、叫んだ。

「雷！^{いかすち}」

残りの一人を片付けると、少女は、謎の男に近づいた。

「師匠、終わりました」

師匠と呼ばれた男は、再び刀で空間に切れ目を入れた。今度は、

そこに入るためだ。

「ルーシー、帰るよ」

無愛想な印象だが、声は優しい。

帰り際、男は人質に向かつて軽く会釈した。ルーシーの方は、子供たちに向かつて笑みを浮かべる。

二人は、現れた時と同じように、幻のように消えた。

人質だった五人は、まるで夢を見ている気分だった。ただ、死傷

した十人の盗賊の存在が、それが現実だったことを物語っている。そして、去り際の少女の瞳が、いつまでも印象に残った。

ラストミッション

一週間後、クロテニア公国で立て籠もり事件を解決した二人は、マイアール皇国の首都、マイアールで、次の仕事の依頼を受けていた。

そこは、酒場の一階だった。マイアールで一番の賑わいを見せる店「孔雀亭」。

その店のテーブル席に向かい合わせに座る二人の男。彼らの内の一人は年配で、一見、普通のおじいちゃんだが、目つきが鋭い。もう一人は若い男だ。濃紺の衣装に身を包み、腰に長刀を差している。髪の色は黒く、目は山葡萄のように深くて落ち着いた色だ。憂いを含んだ表情は、少し東洋系が入っている。

「タックス、クロテニアではご苦労だったな」
年配の男が^{おれ}労いの言葉をかける。それに対して、若い男の方は不満げだ。

「頭、危ない仕事は回さないはずでしたよね」
タックスは、あまり強い調子ではなかったが、しっかりと非難の意思を伝えた。

それに対して頭は、高圧的な態度に出る。
「俺達ギルドに、多少の危険は付きものだろ？何だ、トウシロウじやあるまいし！」

興奮するお頭に、タックスは、相変わらずの冷静な話し方で、静かに語った。

「それと言うのも頭、ルーシーをこれ以上、戦いの場に出したくないんです。あの娘は、いつも相手を気絶させるだけで、命を取るような事はありません。多分、死なないように魔法力をセーブしてい

るんでしょう。今後、その甘さが命取りにならないとも限りません。ですから、一瞬の判断が生死を分けるような仕事はさせたくないんです」

情に訴えかけるようなタックスの話を聞いた頭は、ついしんみりとした。

「悪かった。たまたまお前達しかあの近くにはいなかったし、どうしても断れなくてな。なんせ、クロテニア公から直じきのお願いだ。なんでも、人質の中に、クロテニア公の娘、エルシーク姫がいたそうだ。あの時、人質の中に、十歳くらいの綺麗な女の子を見なかったか？」

タックスは、記憶の糸を辿った。

「そういえば、一人だけ気品のある子供がいたような……」

「よく思い出しとけ。また縁があるかもしれないねえぞ。ところでよ、ルーシーは、まだ俺を怖がっているのか？」

お頭とタックスがいる席からかなり離れた席に、ルーシーは座っていた。彼女は、青灰色の大きな瞳で、こちらをじっと見ている。

「お頭の顔が怖いんでしょう」

タックスが、苦笑まじりに答える。

「それにしても、いくら何でも離れすぎだろ！」

納得がいかない様子のお頭を、タックスがとりなした。「まあ、許してやってください。ところで、仕事の件ですが？」

タックスに促され、慌ててお頭は本題に入った。

「今度の仕事には危険はないぞ。早速だが、明日から開催される馬上槍試合で、スカロンという新人が出る。そいつを優勝させるために、二人の有名な騎士を出場不能にして欲しい。ジークフランドル卿と、ジュードパーシ卿だ。ただし、殺しは駄目だ。事が大きくなる」

タックスには、依頼主の意図がピンと来た。「賭けが絡んでいますね？」

「ああ、しかも莫大な金額だ。受ければ、報酬もすごいぞ」

タックスは、すぐに了承した。

「やらせて下さい！お頭。これを、ルーシーと組む最後の仕事にします」

「タックス！ルーシーと別れてどうするつもりだ？」

お頭の質問に、タックスは沈んだ声で答えた。

「彼女には、まとまった金を持たせてギルドから足を洗わせます。私は、次の相棒が見つかるまでは、一人で仕事をします」

タックスのこの台詞が出た時、遠く離れた席に座るルーシーが、顔を曇らせた。

打ち合わせを終え、お頭と別れたタックスに、ルーシーが寄り添った。酒場を出て、宿に戻る。

タックスとルーシー、この二人は、ギルドと呼ばれる組織に属している。ギルドとは、合法、非法を問わずに危険な仕事を請け負う所だ。例えば、盗み、暗殺、脅迫、などをするかと思えば、救出、護衛、助っ人、などの仕事もこなす。つまり、金次第だ。

二人は、宿屋に着くと、すぐに部屋に入った。

「ルーシー、今夜はお仕事をするから、早く寝なさい」

ルーシーは、タックスの言葉に素直に従った。ベットにスルリと潜り込むと、体を丸めて眠った。

その寝顔は、とても気持ち良さそうだった。

「まったく、しょうがない娘だ・・・」

もうすでにお年頃のルーシーを、タックスは何度も別の部屋にしようとした。だが、寂しがり屋の猫みたいに、彼女はタックスのベットに入って来てしまうのだ。だからといって、男女の関係になるわけではない。タックスにとってルーシーは、妹みたいな存在だった。

馬上槍試合

次の日の朝、タックスとルーシーの二人は、馬上槍試合の試合会場にいた。

各公爵家の館や、教会などの高い建物に囲まれ、まるで都市部のへそみたいに見える。馬上槍試合の会場は、そんな場所だった。

数万の観衆の目が、その両雄に注がれていた。槍先の誉れを尊ぶ誇り高き騎士たちが集う馬上槍試合は、準決勝まで進んでいた。

色鮮やかに飾りつけされた馬。銀色に輝く鎧。左手に盾を持ち、右手には三メートルあまりの長槍を持つ。両雄の間には、五十メートルの距離があった。それが、合図の旗が振られた瞬間、ぐんぐん短くなる。

そして、激突の瞬間！擦れ違いざま、片方の騎士が落馬した。

<ジューパージ！ パージ卿！>

観衆が、勝利者の名を称える。

勝利者は、頭上に槍を振りかざしてそれに答えた。

そして、皇王や貴族たちがいる立派な特別観覧席に、深々と頭を下げると、颯爽と走り去った。

興奮冷めやらぬ観衆が、急にざわめき出したのは、その時だった。それは、次はスカロン卿とジークフランドル卿との試合なのだが、ジークフランドル卿陣営から、出場辞退の意思表示である白旗が出ていたからだ。

その白旗を見て、大衆席にいた二人が立ち上がった。そして、試合会場を後にする。

「師匠、うまくいきましたね」

ルーシーは、嬉しそうにタックスに話しかけた。

「まあ、さすがのフランドル卿も、鎧を盗まれては出場できないだ

る。鎧は、体に合わせてオーダーするから、他の人では合わないし、たとえ合ったとしても、恥ずかしくて借りられないだろうしね」

無事に一仕事を終えたタックスとルーシーは、宿の部屋でささやかなご馳走を味わっていた。明日の決勝戦にジューパー・ジ卿を出場させなければ、この仕事は終わる…。

タックスは、この仕事を最後にルーシーにギルドから足を洗わせようと考えていた。だから、彼に取っては、これが二人の最後の晚餐になる予定だった。

その事は、ルーシー本人は知らないはずだ。なのに、彼女はあまり元気がない

「どうしたんだい？　あまり食が進まないようだね」

タックスの問いかけに、ルーシーは小さな声で答えた。

「師匠、わたし、足手まといですか？」

ルーシーは、青灰色の瞳を伏せていた。

「なぜそんな事を聞くのかな？」

ルーシーは、タックスの問いかけに答えない。タックスは、ルーシーの顎の下にそっと指を添えて持ち上げる。

「ほら、話してる時は相手の目を見なければだめだろ？」

タックスは、言葉を失った。ルーシーは、泣いていたのだ。涙が、きめ細かい肌の上を、玉状になって転がる。

「ルーシー、昨日のお頭との話を聞いていたのか？」

あんなに離れて座っていたのに？」

タックスの質問に、ルーシーは涙を拭いてから答えた。

「唇の動きを読んでたの…」

「そうか…それなら話が早い。ルーシー、君はこの仕事を最後に、ギルドから足を洗って普通に暮らすんだ。まとまった金も用意する」
タックスの申し出を、ルーシーはキッパリ拒絶する。

「嫌です！」

ルーシーがこれだけハツキリものを言ったのは、タックスが知る限りこれが初めてだった。

「聞き分けのない事を言うもんじゃない！ 君は、ギルドに居るには優しすぎるんだ！ 私に拾われた恩なら充分に返して貰った。これからは、自分の人生を歩んで欲しい」

タックスは、いつになく強い調子で説得した。それが、ルーシーのためになると信じていたからだ。

「師匠！わたしはまだまだ師匠の役に立ちます！ わたしを一人にしないで！」

ルーシーもまた、食い下がる。

「ルーシー、君は何が望みなんだ？何をしたい？」

タックスのこの質問に、ルーシーは黙り込んでしまう。そして、下を向いた。

「……」

やがて、意を決したように顔を上げると、ぶたれるのを恐れる子犬のように、遠慮がちに言った。

「わたしの望みは、師匠のお嫁さんになって、どこか遠くで静かに二人で暮らすこと……」

ルーシーの答えに、今度はタックスが沈黙する番だった。

「……」

しばらく、気まずい雰囲気が流れる。

「嘘、嘘、本当は何も考えていません。だけど、師匠の役に立ちたいのは本当ですよ。だから、チャンスを下さい。わたし一人でジューパージ卿を試合に出られなくしたら、また一緒に仕事をして下さい。もし失敗したら、師匠の前から消えますから……」

ルーシーの提案を、タックスは検討した。人見知りで引込み思案。自分からは決して攻撃できないルーシーが、この仕事を成功するとは考えにくい。

「いいでしょう。私はいつさい手助けしませんよ」

タックスの言葉に、ルーシーは頷いた。

そして、部屋から出ようとしてドアを開ける。その時、タックスに向かって振り返った。

「師匠は、わたしと別れて寂しくないの？」

その言葉がタックスの胸に響いた時、部屋のドアがボタンと閉まった。

ルーシーが出て行った後、タックスは、彼女が残した言葉の意味を考えていた。

ルーシーとタックスが初めて出会ったのは、三年前だった。ルーシーは、奴隷市場で売りに出されていた。それを、タックスが買い取った。魔法能力があると見込んでのことだ。いわば、利用できそうだから買ったまでのことだった。最初の一ヶ月、彼女は一言も喋らなかった。口がきけないのかと思ったほどだ。しかし、徐々にタックスに対して心を開き、とても慕ってくれていた。

「寂しい？ そんなはずはない」

しかし、否定してはみたものの、何故か不安が消えない。

「それにしても、ルーシーは遅いな」

彼には珍しく、イライラしていた。それは、すぐにシヨンボリして帰って来ると考えていたルーシーが、なかなか帰って来ないからだ。

「やはり、私も寂しいのかも知れない。今まで考えもしなかった。

ルーシーがいない生活を……」

タックスは、改めて考えてみて、自分に取ってルーシーがいかに重要な存在になっていたのかに気が付いた。

彼女が「二人で暮らしたい」と告白したとき、なぜ黙ってしまったのか？

「すまないルーシー、私がバカだった。一緒に暮らそう。二人で土でも耕して、共に生きよう。そして、ギルドから足を洗おう」

タックスは、ルーシーを追って飛び出した。

最後のお願い

一方、ルーシーは、彼女なりにちゃんと計画を立てていた。彼女は今、ジュードパージ卿の館の厩うしやにいた。馬に下剤入りの餌を食べさせて、明日の馬上槍試合を棄権させるつもりだった。

「君たちには可哀想だけど、師匠の側にいたい。ごめんね」

馬に下剤入りのニンジンを食べさせながら、ルーシーは謝った。馬上槍試合用の馬は六頭だった。

「おい、お前、何してる！」

突然、声を掛けられた。振り返ると、背の高い男が立っていた。彼は、筋骨逞しい男だった。腰から剣を下げている。顔立ちは、顎がかなり張っていて、いかにも頑固そう。瞳の色は緑で、目は小さい。鼻が大きく、口も大きく、大胆な作りの顔をしている。

「お前か！？ フランドル卿の鎧を盗んだのは！ お前のお陰で俺は不戦勝。せっかく正々堂々と実力で勝って、名を上げようと思っていたのに、よくも台無ししてくれたな！」

どうやら、この騎士は、スカロン卿のようだ。彼は、試合の妨害者を捕まえるため、ここで張り込んでいたらしい。次は馬を狙って来ると読んでいたのだ。

ルーシーは、まだ逃げる訳にはいかなかった。全部の馬に下剤入りのニンジンを食べさせていないからだ。スカロンと一戦まじえなければならぬ！

スカロンは、剣を引き抜くと、ルーシーに突き掛かった。

ルーシーは、金糸で輪っかを作ると、それを相手の剣先にはめる。それと同時に、魔法能力も発動した。

「雷！」

一撃で気絶するはずの電撃が、スカロンには通用しない。逆に、金系の防御を突き破り、スカロンの剣がルーシーの体を貫いた。

「うっっ」

小さなうめき声を上げて、苦痛に顔を歪める。ルーシーは、そのまま瞳を閉じた。

スカロンとルーシーの顔は、まじかにあった。若くて美しい死に顔に、スカロンは思わず見とれていた。

その時！ ルーシーの髪の毛が逆立った。そして、目を開く。瞳の色は、金色だった。

「雷！」

ルーシーは、スカロンのこめかみに指先を当てた。そして、電流を流し込む。

「があっ！」

スカロンの鼻と耳から血が流れる。さらに、目からは煙が立ち昇った。

スカロンとルーシーは、その場で倒れた。

ルーシーは、もう動けなかった。剣を突き通された体は、すでに限界だ。

そんな時、信じられない事が起きた。死んだはずのスカロンが起き上がったのだ。

彼は、ルーシーに刺さった剣を、彼女の体から引き抜いた。体の中を異物が通る違和感と、それに伴うともなう激痛が、ルーシーを苦しめた。しかし、必死に死んだふりを続けた。

「この男、人間じゃない。化け物だ！」

ルーシーは、恐怖に近い感情を抱いていた。

スカロンは、特にルーシーを気にすることもなく、剣を鞘に収めた。

そして、厩を後にした。

後に残ったルーシーは、出血が酷かった。彼女は、傷口に手を当

てると、「雷」で傷口を焼いた。それで、とりあえず出血は止まった。

「もう、師匠に綺麗な身体を見せられないな……」

そう思うと、涙が止まらなかった。

「一生に一度だけお願いします。神様、師匠にもう一度だけ逢わせて下さい」

ルーシーは、自分がどんどん弱っていくを感じていた。やはり、願いは叶わないんだ。神にも運命にも見捨てられているんだ。ルーシーが、そう諦めた時だ。

突然、何もない空間に、刀の切っ先が現れた。その刀は、そのまま縦に空間を裂き、切れ目を入れる。そして、そこから現れたのは、タックスだった。

「願いが叶った……」

ルーシーは、ひとこと呟いた。

タックスは、ルーシーを抱き起こした。顔色から、死期が近いことが、一目で判った。

「ルーシー、しっかりしろ！誰にやられた！」

ルーシーは、力なく首を横に振った。

「言えません。師匠を危ない目に遭わせたくないから……」

彼女の健気な言葉に、タックスは感きわまった。

「ルーシー……お前つてやつは」

それを聞いて、ルーシーは、微かに笑顔を見せる。

「お前……か、今度から、わたしの事はそう呼んでね」

ルーシーの頼みに、タックス頷くことしか出来なかった。何故なら、彼は、その場で号泣しそうだったからだ。

ルーシーは、タックスにどうしても言っておきたいことがあった。「今までありがとう、師匠。そして、……愛してます、タックス……」

ルーシーは、それだけ言えて安心したらしい。眠るように息を引

き取った。

タックスは、その場で号泣し、気絶した。
深い暗闇の中に落ちて行っただ。

そして、月日は流れた。

「おい！ タックス！ 起きろよ！」

タックスは、誰かに起こされた。目を開けると、目の前に若い男がいた。好奇心旺盛な茶色の瞳。背は高いほうで、なかなかの美丈夫だ。全体的な雰囲気は、猫科の猛獣を思わせる。彼こそ、現在のタックスの相棒、コーディーだ。

「…また、ルーシーの夢を見てたのか」

タックスは、自問自答する。ルーシーが死んでから、十年の歳月が流れていた。

考え事をしているタックスに、コーディーが言う。

「さっさと行くぞ！ 日が暮れちまうぜ！ これからリサリタって名前の女に逢って、仕事の打ち合わせをするんだからよ！」

<了>

（後書き）

この作品はタイトルにもあるように、「マイアール皇国記 魔人復活編（P214 税込み1050円で全国の書店から注文可能）」の外伝です。

宜しくお願いします

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1354b/>

ラストミッション（マイアール皇国記外伝）

2010年10月8日15時38分発行